

2025 年度日韓次世代学術フォーラム

2025 年 6 月 28, 29 日に、釜山の国立釜慶（プギョン）大学にて第 22 回日韓学術フォーラムが開催され、東大宗教学からは坪井と細野の 2 名が参加した。

事前エントリーで 2000 字ほどの発表内容を用意し、エントリーが通った後に A4 で 4 ページ分（厳守）の発表原稿を書く。この原稿が韓国語訳されて提供され、発表中は通訳が行われなかったため、原稿にないアドリブを入れてしまうと韓国側に通じないことになるので注意が必要だ。5 月下旬までにここまでの作業が行われるため、あとはパワーポイント作成（文字数を多くしすぎないこと）と、指定討論者への質問を考える事位しかない。来るべき訪問に向けて、見ておきたい場所を考えておこう。

発表内容は、日韓関係に関わるテーマを前面に出す、あるいは日本社会に関する新奇性のある視点からの研究を提示すると採用確率が上がるように感じる。また、1 回発表者に選ばれると次からの採用は厳しくなる。

27 日に釜山へ到着し、大混雑の入管を抜けると、熱中症警報がスマホから鳴り響く中で、一路国際市場へ向かった。朝鮮戦争によって釜山一帯へ追いやられた韓国国民が、日々の生活の糧を売買するために始めたこの市場は、今なお活気にあふれ、迷路のように入り組んだ店は見えても大変に楽しい。人が大勢集まるところには宗教施設も生まれるもので、大日本帝国時代に建立され、朝鮮戦争では避難施設ともなった大覚寺や、大韓聖公会教会（1924 年建立）、天主教中央聖堂をはじめとする数十の教会（喫茶店よりも教会が多いという噂は伊達じゃなかった）を見学し、やたらと日本の漫画本が目立つ宝水古書店街で夕食をとった。

夕食後は大幅に門限を過ぎて宿舎に到着し（スタッフの皆さんごめんなさい）、金曜夜には徹夜で祈祷会をする教会があると聞いて、釜山最大の教会である水営路（スヨンロ）教会へ向かった。教会では、大ホールのスクリーンに映る牧師さんの説法（韓国語のみ、外国語字幕ほぼなし）をおとなしく聞いている信徒さんの姿を見ることができた。駅前にもう一つ、右二洞（ウイドン）教会という長老派の教会があったので入ってみたが、インストの讃美歌が流れる中で壇上に上がった信徒が「アボジー!!」と絶叫しながら祈りを捧げる姿や、聖書を読みながらトランス状態で祈る人々の姿など、ホットな信仰の姿を目の当たりにすることができた。受験の時に読んだ百科事典の、「通声祈祷」や「曹溪宗」といったワードが、実際の現場を見ることでよりリアリティを持って理解することができた。皆さんも、あの事典に出てきた韓国の宗教関係のワードについて、気になるものを事前にリサーチしておくことで、韓国の旅をより実りあるものにできるかもしれない。

見るべきものも見たし満足、というわけにもいかず、翌朝は 6 時起床で発表に向けたアップをする。眠気覚ましに韓国の FM ラジオをかけ



ると、お経が聞こえてきた。宗教団体が放送局を持つことができるため、釜山だけでも仏教系放送が2局、キリスト教放送が3局もある。事前に周波数をチェックして聞いてみると、見るだけではわからない現地の生きた宗教のイメージがつかめるかもしれない。

私は文学部門、細野君は宗教部門で発表を行った。細野君の日本の新宗教とお守りに関する発表は、その新奇さもあって多くの関心を集めていた。韓国におけるお守り文化について、民間宗教者文化において類似したものが存在するという指摘を得るなど、より深い研究に結びつく情報を手に入れていた。

私が参加した文学・言語に関する発表は4件しかなかったこともあり、あまり観客は集まらなかった。しかし、文学と信仰継承に関する研究の技法を応用して作成した、日韓の文学作品に現れる越境する宗教文化についての発表をしたことで、先生方からの貴重なアドバイスを手にすることができた。

昼食後、戦後生まれ初の駐日大使を務めた柳明恒さんの講演を聞く。ユーモアにあふれた話しかたで、2000年代の日韓関係の最前線で起こっていた外交秘話をたつぷりと伺うことができた。

午後は発表がなかったため、興味のある発表をはしごして、いくつかの質問を行った。ベトナムや中国からの留学生、日本人の改宗ムスリムの方にも会うことができ、より多様なバックグラウンドの人々との交流ができた。

夕方にはホールにて立食パーティに参加し、多くの先生方や同世代の学生の皆さんと交流することができた。残念ながら翌日に仕事があったため、1次会のみで辞去し、翌早朝に購入した大量の書籍で二宮金次郎になりながら帰国した。

日本語のみで参加できる数少ない海外の学会であり、釜山の市街地であれば地下鉄の表示などにも日本語がある（多言語社会のありがたみを痛感できる）ため、海外で学会発表した、という実績解除をしたい修士・博士の人にはこれ以上ないほどおすすめである。大学や研究範囲、そして国境を超えて人脈を広げることができるので、ぜひこのチャンスを生かしてほしい。

ここで、パーティの2次会でソウル大の皆さんと親交を深め、さらに翌日の研究旅行も満喫した細野君にマイクをつなぎたい。（文責：坪井俊樹）



私は、日韓の陽気な「宗教学界の交流」（韓国の居酒屋での二次会）に参加させていただいた。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。



単なる居酒屋での飲み会であるにもかかわらず、あえて「宗教学界の交流」などという大仰な表現を用いたのには理由がある。今回のフォーラムにて、朴炳道先生と新里喜宣先生によって、「日韓の宗教学者同士の交流」に関する意義が議論されたからだ。朴先生のご発表によれば、「宗教学者」の交流の常態化はこれまでも幾度となく試みられてきたが、そのたびに様々な事情で途絶えてしまっているという。一方で、今回で 22 回目を数える「日韓次世代学術フォーラム」は、大学院生同士の交流の場として着実に役割を果たしており、今後もその重要性を増していくだろう。

日韓の宗教学院生による交流は、単に「宗教学界」の発展に寄与するにとどまらず、私たち「個」としての大学院生それぞれが、似ているようで違う、違うようで似ている眼差しの中で、改めて自身の研究を問い直すきっかけとなる。あの場において、お守りを研究する私は、現世利益を中心として発展してきた韓国の護符文化から問い直しを迫られ、春香遊びを研究するソウル大の院生は、日本の「こっくりさん」や「かごめかごめ」との比較による検討を迫られていた。

このような「宗教学界の交流」は、フォーラム会場の外でも行われる。陽気な二次会の場においても、宗教学における「媒体論」やハン・ガンの小説についておしゃべりをすることができた。居酒屋という空間だからこそ話が様々な所に脱線したのが、その脱線こそが他者そして、韓国文化に対するより深い理解をもたらすきっかけになった。

今後このフォーラムに参加される方には、ぜひこの陽気な「宗教学界の交流」にも、勇気を出して飛び込んでみることをおすすめしたい。そこには、自国にとどまっていたでは決して得られない、「同世代の他者」としての宗教学との出会いがあった。

そうした対話の手応えを感じた翌日、私は調査旅行に参加した。だがそこで、思わぬ沈黙に出会うことになる。本来ならば、調査旅行にて国連記念公園か国立日帝強制動員歴史館のどちらかを参加者が選択することができたのだが、国立日帝強制動員歴史館への視察は急遽中止になってしまった。博物館側としては、国交正常化 60 周年を迎えた年に、戦争の被害者として、終戦から 2 世代以上離れた日本人の院生に対して語ることは、我々日本人を加害者に強制的に位置付けてしまうことになるというためらいや配慮によって、断りの判断をしたらしい。博物館への視察は参加者が選択するため強制ではないのだが、選択肢が与えられているかどうかは重要な問題ではないようである。被害者が加害者に語るためのためらいや配慮は、戦後の両国の関係が加害者・被害者という単純な二分法によるナラティブで回収されない深さを我々に示しているのではないだろうか。このようなトラブルも含め、日韓の院生が相手の国に行くこと、また自国に招くことによって生じる独特な体験は、日韓という 2 カ国によって開催される本フォーラム特有なものだろう。

大学院生が自分の学問を発表する場であり、「同世代の他者」としての宗教学との出会いの場であり、独特な体験を生じさせる「日韓次世代学術フォーラム」に是非皆さんも参加の検討をしてほしい。（文責：細野一斗）